針葉樹會報

通卷第九十七號

増毛山脈白雪いたゞきて見ゆ

望月達夫

きしきしと雪の鳴る路雪踏みて辿る彼方に白き山あり
目地のかぎり雪雪雪につゝまれし自然の姿今冬のさ中なり
雪ふかき北のまもりの身にしあれど借りたスキーに心おどりつ

再び日本海を見し朝に

あかつきのさ霧流れて風たちぬ波のうねりに淡く見えにき
わたつみの藍かきながす沖つ邊に利尻、天賣(テウレ)の島ありと謂ふ

車窓所見

名も知れぬ低き山波雪ふかみそのふところに村のありたり
ひむがしの空あからめど影冴えしつめたき鎌の有明の月
雪ふかき野尻の木々のはだか木のうしろに白き高山(タカヤマ)のあり

伊吹山

PEN

伊吹山は名古屋の西に、丁度東京から大菩薩邊りを望む位置に大きく見える。高さは一、三七七米でそんなに高くはないが、濃尾平野の西を限る多雪地にあり、又森林が少いので眞白に見えるのと、筑波山や赤城山の樣に伊吹嵐が吹くと云ふ事でこの土地の人に冬將軍の先觸れとして恐れられてゐるのとで、その存在もハッキリしてゐる。

小栗君やこちらの人の話によると雪がよくない事、又途中が泥濘であることを聞いてゐたので雪の降つてる最中に行き度いと思つてた。會社の建物からよく見えるので、行こうと思ふ前日邊りから注意してゐると雪雲がかかつてゐて姿が見えない。丁度工合がよさうだ。

一月十七日(火)夕方五時十分名古屋驛發。連れは會社にゐるOと云ふ女の子。こちらの支店にはO姉妹と云ふ相當の山好きがゐると云ふ噂を聞いて來た。成程身體は大して大きくはないが、よくしまつてゐて輕快だ。姉の方は冬、御岳へテントを持つて行つて、飛彈へ越したと云ふ話や、昨年の夏、双六谷を上つた話をする。双六谷も堀岡君と二人で七月末に上つた時、金木戸で泊つた森本氏宅に四五日遲れて八月始めに泊り、翌日僕達は打込谷に泊つたが、人夫を連れてゐとは云へ、更に萩原の岩小屋を越してレンゲ谷から九郎衞門澤を黑部五郎の小舍に行つてる健脚振りに驚かされる。

始め僕一人で行くつもりで伊吹への道を聞いてゐたら妹の方が連れて行つてくれと云ふ。向ふが道を知つてるのだし、夜道だから猶更助かるから、こちらが案内して貰ふことにする。

汽車に乘つて山の話を聞いて見ると相當方々へ行つてゐる。鈴鹿の方も詳しいし、大臺ケ原にも行つたと云ふ。去年も今年の正月も、平湯へ行つたが、昨年の正月は中ノ湯から入つたと云ふ。それで僕も中ノ湯から上高地に入つたがと、日を聞いて見ると同じ日に、松本で飯田屋に泊り、同じ電車、同じバスで前川渡から歩いてゐる。姉さんが先に平湯に行つてるので兄さんと二人で中ノ湯に着いたのが五時過ぎだつたと云ふから、小谷部君やベンちやん達と一しよに圍爐裡端にゐた時に入つて來たのが今思へばそうだつたのである。あの時喧嘩もしないでマア好かつたと云ふ譯だ。そんな話をしてる中七時、近江長岡に着く。雪が降つてゐて二尺近く積つてる中を懐中電燈をつけて行く。一時間半ばかりで春照を過ぎ上野の部落に近づく頃、見上る高さに電燈が雪空に明るく點いて並んでゐる。あれが今夜泊る一合目と云ふ。神社の前に出て右に急坂を登る。ガツクリ坂と云ふそうだ。三十分許り上ると左側に小屋が丁度霧ケ峰の茶屋の樣に並んでゐる。二十軒位もあるだらう。上の方の伊吹亭と云ふ處に入る。九時十分。先客が二人。名古屋高商の學生である。一寸休んでリックを塗る。宿の親父が五右衞門風呂に入りなさいと云ふから入つて見たら驚く。普通の小判なりの桶で緣が少し高い。入つて坐ろとお湯が乳の邊までもない。寒いなあと云つたら蓋をするんだと云ふ。成程坐つても頭のつかへぬ程度に蓋が高い。それ丈けに入る時は、桶の一角が一尺四方位の扉になつてゐて、蓋とその扉とを開けて

入る。そして蓋をする。半分蒸し風呂である。それに伊吹名産お百草なる藥草が入つてゐて藥湯となつてゐる。湯の量は少くても好い加減暖まる。經濟的な江州人の考へ方に感心して、家に歸つてやつて見度くなる。

風呂に入つてる間にOはもう電燈の明りで滑りに行つてる。

部屋は八疊敷が一つ。其處に蒲團をしきつめて置炬燵を二つ入れてある。夫々隅に陣取つて眼りについたと思ふと三時頃からドヤ〳〵人が入つて來る。名古屋を十一時頃の汽車でたつて夜道をかけて登つて來る人達で、是が伊吹の普通のスケジュールだそうだ。又四五人連が入つて來て狹い部屋に鮨詰めになる。外の連中は茶店に腰をかけて關西辨と中京辨で、海女の噂りをやつてゐる。氣の早いのは大分滑つてるらしい。こちらは炬燵に暖まりながら六時頃までウツラ〳〵する。

朝食をすませて七時出發。雪はまだ降つてゐる。一時間半許り登つて三合目の小屋。此處にも人がゐて、泊つた人も大分あるらしい。冬、宿泊可能の一番上の處だ。暫く休んで登る。雪は矢張り止まない。周圍は何も見えない中を幾組か先に登つたシュプールを便りに登る。四合目、五合目。突然バタ〳〵と音がして、それからガア〳〵と啼き聲が聞こえて、鴨が三四米の低空を、一羽を先頭に二三十羽丁度飛行機の様に三角形を組んで南の麓に向つて霧の中を互ひに呼び交して飛んで行く。

六合目。唯眞白な斜面を登る。

此の邊で歸らうとシールを外す。後は愉快な滑降でと云ふとうまそうだが、他人(ひと)様が見たら樂ぢやなからうと思はれる滑り方だ。

それでも下り始めたと思ふ間もなく又三合目の小屋の前に出る。一息入れて一合目に歸る。霧が深く、踏み固めた雪の上をカタ〳〵と鳴るスキーの音丈けが異樣に響いて、ツイ鼻先に小屋が見えて始めて氣がつく。八合目から一合目迄熟練者なら十分もかからぬと云ふ話。

晝食をすますと二時間ばかりゲレンデで遊んで一時半に下る。急傾斜のガツクリ坂をスキーをつけて半分許り下りて見たが、踏み固めた狹い道で、かついで歩いて行く人の方がドンドン先に行くと云ふ始末。上野から驛まで、まだ雪が降つてゐた。

三時四十五分發上り列車に乘つて二三尺雪の積つた柏原、關ヶ原を過ぎて大垣に來ると、もう黑土が現はれて、名古屋の方の空は赤々と夕陽に輝いてゐた。

秩父東澤遡行木賊山遭難報告

細野眞令

十、十五

シラフザツク等使用器具及食料分擔等を割當てる爲部室に集合すゐ筈であつたが、前田君が休んだので明日に延ばす事に決めたが、一年生の體力章檢定が行はれるので一年だけ部室に集合した。丁度シラフが三個あつたので大崎、長沼、山内に分配して、二年の分は清水君達より借りる事にしたが、一個だけ不足した。だが山内は學校を休んで參加しない事がわかつたので全部行きわ

たる事になつた。細かい注意等は一際明日にする事として歸つた。

十、十六

前田君が來たので午後一時部室に集合した。食料等持物の分配を行つたが飯盒が一個足りないので部室を探したが見つからなかつた。

仕方がないのでアルミニュームの大鍋を持つて行く事とした。米は各二升、野菜は長沼、大崎の兩君が適當に何んでも買へる物を持つて行く事とした。前田君は佃煮を、僕は味噌を大體粗食で行く事にした。吉澤君は特に鮭罐を持つて行つてくれると云つた。

一應地圖等を見ておく樣にとだけで別に注意はしなかつた。之は前々から學校で顔を合せる度に、マツチ、新聞は持つて行かなければいけない等の話はあつたからである。

コースは初め

鹽山—廣瀬—(東澤を遡行)—甲武信岳—柳小屋—栃本—秩父

(三日間)

の豫定であつたが、一年が初めての事でもあるし、冬山の準備として少し歩いた方がよいと云ふので

甲武信岳—國師岳—朝日岳—金峯山—黑平—甲府 と四日間で、縱走してゆかうと云ふ事にした。

出發も最終でなく午前八時の準急で立つ事に決めた。

今日は三日間の休日を利用して行かうとする人々が部室へ出入りして、部室の中は大分ゴタゴタしてゐた。一般部員の人達もかなり來てゐた樣であつた。山田さんが居て前田君をつかまへて「何處へ行くんだね、一應コースを知らせて置けよ」と云ふので前田君は地圖を擴げて說明してゐた。「皆元氣で行つて來いよ」と云はれて一年生初めはりきつて「左樣奈良」と別れた。

十、十七 晴

混雜するから皆早目に來る事になつてゐた。僕は七時十五分頃着いたが、汽車は構內に入つてゐて、豫想通りひどい混雜で、階段を埋めつくしてホームへ上る事が容易でなかつた。大崎は先に來てゐたが他の者は來てゐなかつた。席は五人分取つておいてくれた。暫くして前田、古澤、長沼君が順次來た。古澤君は何時も早いのだがどうしたのかと云つたら、「寢ボウしたんでね」と笑つてゐた。清水君がシラフザツクを持つて來てくれた。ホームへ上れないので階段で話しをしてゐたら前田君が來た。「隨分油をつけたねえ」と清水君が云ふとえゝと笑つてゐた。奇麗に髮を分けて來た彼は別に話もせず戻つて行つた。「皆んなの所へ行つて見ようかな」と清水君は立川迄乘越と云つたが許されなかつた。

鹽山着十時三十四分、下駄、セツタ、登山靴の五人はぞろ〳〵と自働車の發著所へ行つた。

切符を買ふ時「その大きなリュツクは一人分とりますから」とやられた。自働車は壽司詰めで、もまれながら窪平に着いた。

僕は下駄でもいゝだらうと思つて換へなかつた。皆もセツタ、下駄で歩き出した。朝が早いのでもう腹が減つたけれど乾德登山口の茶屋迄がんばる事にした。

茶屋で湯を出してもらつて晝食をとつた。陽光は强いので暑く

汗をびつしよりかいてしまつた。下駄を足袋にかへて夕方早く二俣小屋へ入らうと相當ピッチをあげた。僕が先に立つてぐんぐん行くと長沼君が急ぐ傍に附いて來たが他の者は相當後に居た。トロ道でない笛吹川の右側の道を上り下りして進んだ。

トロ道の方が少し近いと云ふ事であつたが廣い、いゝ道だからと右手を行つたのだつた。

三時頃廣瀬の部落に入つた。少し休んで笊の水を飲んだ。たばこ屋旅館の右側を過ぎてトロ道に出で、くねくねと枕木を見つめながら深い笛吹の谷に沿ひまだかくと今日の夜伽の宿を求めて進んだ。山小屋らしいものが見えた。やれやれやつと着いたかなあと思ふとそれは何々事務所とありカギの懸つた禁足の家であつた。薄暗くなつて來たがまだ小屋は見當らなかつた。靜かな谷は夕暮が早く紅葉した谷間も、木立も霞んで薄墨色に塗りかへられて行く。突然前方に人聲がする。彼等は材木の引上げに來て居る者とわかつた。此邊に小屋はないかと問ふと何にもないと云ふ。

あるはずだと云ふと四月頃取壞してしまつて全然使用出來ないと云ふのでどうしたものかと話合つてゐたら、一一晩位なら留めておげよう」と云ふので何だか氣味惡かつたが五人も居るので氣强くなつて、それではお願ひしますと小屋へ引かへした。二十分程下り人夫小屋へ着いたがものすごく汚い小屋で、中は眞暗で見當がつかない。

彼の人夫達は思ひの外親切ですぐ火を作つてくれお茶も奬められ食事をする時には漬物と南瓜の煮たのを出してくれた。佃煮がなかつたからとコロッケを買つて來た前田君は少し分けて彼等に喰べてもらつた。前田、長沼、大崎の三君が夕食の支度をしてくれたので明朝は古澤君と僕とやる事として炊事は當番制で皆やる事とした。火はどんくと燃してくれるし飯は充分喰べたし後は寢るばかりとなつて足を投げ出し煙草をふかして滿足感を味はつた。

人夫達は愉快そうに昨夜の續きの勝負事を始めた。一行も唯何もする事もなく何を話すでもなかつた。「寢よう」とシラフを擴げたのは八時頃であつた。足の方は暖かいが頭の方は隙間風が入つて來て寒かつたがシラフの中で二三回寢返りをうつたかと思つたら夢の中に居た。

十、十八　薄曇

六時半出發の豫定であつたが氣持よく寢過ごしてしまつて起きたのは六時、すぐ傍の古澤君を起して炊事を始めた。味噌汁で簡單に喰べて行からと云ふ事になつたが充分喰べてしまつてから、晝食の分が飯盒に一ぱいしかない事に氣付いて急く炊こうと云ふと、出發が遲れるから途中か或は小屋へ入つてから暖かいのを喰べようと食器も濯はずに出發した。時に午前七時であつた。

曇つてはいたが今日一日位は雨は降るまいと思つてゐた。一時には小屋へ着く豫定で。うんとピッチを上げる事にして張切つて出發した。おそくとも二時には小屋に入れると思つてゐた。十時半に金山澤の出合で少休止の後出發しようとしたら雨がポッリくとやつて來た。併し紅葉滴る釜澤の景色、靜かな澤に滑り瀧は箱庭に遊ぶ樣な氣がした。前田君は大きく滑つた所で此の景色見捨難しと、トリミングよろしく古澤、大崎の兩君だけ歩かせて

撮つた。雨は小降りで氣にもかけなかつた。

長沼君は愉しさの餘りトップの前田君の方へたま〳〵出た時、ツルツと足を滑らしズル〳〵と釜に落ちてしまつた。「あはてるな」「しつかりしろ」と皆で元氣付けて引張り上げた。腰までづぶ濡れになつたので着換を進めたが「大丈夫です」と着換えなかつた。ウインドヤッケを着る樣にと云つたので大崎は着たが外の者は誰も着なかつた。

兩門の瀧へ出たのが十一時半頃右に卷いて三、四十分、釜の澤をつめて晝食をとつた。木の下に集りコロッケ二個を分け合つて喰べた。前田君は餘り喰べない樣で、長沼君は大食だからと云つて喰べろ〳〵と進めてゐた。

其所から遡行する事一時半雨は頻りに降つてくる。もう大體ケルンも無さそうだと云つて木賊山から出たらしい尾根に取つ付いて澤を離れた。

前田、長沼、大崎、古澤、自分と云ふ順で登り初めたが前の三人はかなりピッチ早く二人は後れ勝ちであつた。國境線には一時間半位で達する豫定であつたが風雨は次第に强まり寒さは頻に烈しくなつて來た。一時間程は五人は餘り離れず登つて行つたのであるが、古澤君はだん〳〵遲れ勝ちとなり前の三人を見失つて仕舞ふのだつた。前の三人と離れてゆくばかりなので古澤君の前に出て見失はない樣にと連絡を保つて行つた。「オーイ」「ヤホ」と互に激勵し合つて登つて行つた。雨は差程烈しくはなかつた。風はとても强く、寒さがひどくなつた。自分は絶えず大きな聲を出してゐたのだが此時は氣持が惡くなつて「オーイ」と言はうとするとヘドを感じた。古澤君は下からヤホをかけてゐた。何時迄行くも縱走路へは出ず尾根へ取付いてから二時間位經つたらうと思はれるのだが未だ〳〵相當ある樣であつた。

止るとガタ〳〵全身ふるへるので歩かねばならなかつた。前田君の所へ行つて古澤君が遲れてゐるからピッチを緩めてもらをうと思ひ三人の所迄行くと長沼君は相當へばつてゐる樣であつた。既に長沼君のリックを前田君が背負つてやつたのだがバランスがとれないから置いて行かうとしたら長沼君は未だ背負つて行かれると言つて背負つたもの丶疲勞してゐるので足がはかばかしく進まないのであつた。大崎君は元氣の樣に見えてゐたし、勿論前田君は相不變の落着いたものだつた。何と云つても、もう國境線へ出る筈だからと互に元氣付けた。古澤君が「オーイ」と聲をかけた。何處だか、少し下の方から聞える。「オーイ」と答へる近く迄來てゐる樣であつた。話をしてゐる内にも自分は全身がたして仕方無かつた。「大崎をつれて先に小屋へ行けよ」と云ふので直行して行く事にした。前田君は古澤君を待つてゆつくり登るからと云つてゐた。何やら長沼君と話してゐたが、前田君の聲が常に變らず、何の苦も無いかの如くであつたのが後になつても忘れられず、强く印象に殘つてゐる。

自分達は間もなく すごく混み合つた茂みにぶつかつた。石南花、松等が密生してゐるのでリュックには引懸るし前進が困難であつた。「く」の字に身體を曲げて頭から突込み猛進したが木にはねられて轉んだのは數回に及んだ。三十分位してやつとの事で縱走路へ飛び出した。「出た、おい縱走路だ、縱走路だぞ」と思

はずどなつた。その聲に元氣づけられてか木立の間にはさまれて身動きも出來ない樣にしてゐた大崎は松を押し除け、小枝を折つて出て來た。「オーイ、出たぞ」と有りつたけの聲を振りしぼつて怒鳴つたが何の反響もなかつた。釜の澤を吹き上げる風が恐ろしい惡魔の叫び聲の樣であつた。密生した木立であるし、この風では聲が通らないのだと思つた。左手に急ぐ木賊山の三角點を見つけ小屋迄もうぢきだと知つた。大崎はばかに元氣がなくなつて仕舞つて、しつかり足が地に付いてゐなかつた。三角點の所で亦「オーイ」「縱走路だぞ」とどなつたのだが聞こえないらしかつた。前田君も未だあんな元氣でもあつたので餘り氣にも留めなかつた。先に小屋へ入らうと下り初めたが、味噌が慾しいと云ふのでリュックを開け樣としたが開かないのでぢきだから我慢しろと歩き出した。ガレを越して少し行くと亦慾しいといふので、やつと開けて味噌を喰べた。それから百米位して小屋を發見し急いで小屋に入つた。扉を開けたら中に二三十人も居た。自分は誰も居ないつもりでゐたのでびつくりしてしまつた。がストーブに火のあるのを見るや飛び付いて暖を取つたがさつぱり暖かくなくガタ〳〵全身は震へ、足は筋がつゝて非常に痛くどうする事も出來なかつた。小屋に着いた時は何時だか知らなかつたが三時半頃だと知つた。何時迄經つても暖かくならないので着換をしようと思つて、立上つたが筋がつゝて亦坐つてしまつた。三、四十分したら迎へに行かうと思つてゐたが腹は減つてゐるし、身體はなか〳〵暖まらないのでシラフを出して身體に卷いた。もう皆來てもいゝと思つてゐると遠くから聲がしたので「來たな」と思つて居ると外の登山者であつた。雨はまだ降つてゐる相當烈しくなつて來た樣だ。自分一人で迎へに行く事にして出たのが四時半を少し廻つてゐた。

木賊山の頂上迄行かない內に來るだらうと思つて居たが會はず、頂上へ來ても誰の姿も見付からなかつた。變だなあと思ひ「オーイ」と聲をかけるけれども返事がない。「前田」と云つても何とも答がない。之はいけないと思つて聲をかぎりと叫んだのであるが駄目で、あち、こち木立の中へ呼びかけた。ガレの處からどなつて見樣と思つた。其所は風が吹上げるのでとても聲は通るまいと亦頂上へ行つて叫んだが何の返事もない。突然下の小屋寄の方から聲がした樣だつたので「あゝ」來たかと馳け出して行つて見たが誰の姿も見られなかつた。「ヤホ」と云つても返事は無かつた。之は重大事だと小屋へ辿る樣にして馳け下りた。「大崎、誰もわからないから一諸に來てくれ」と云ふと小屋番が登つて來てゐると云つたので、それは都合が良い賴んで見ようと云ふ事になり、小屋番の小屋へ入つた。

一行五人の中未だ三人が登つて來ないので心配だから探したいのだが一諸に行つてもらひたひと賴んでみたが、晝食も喰べて居ないしあの茂みの方は餘り知らないとか、風邪をひいてゐるからとか、暗くなつてから、この雨の中を出たら自分がやられる等と全然受け付けないので仕方なく登山者に事情を話して援助を求める事にした。すぐ八人程出てくれテルモスに砂糖湯を入れ、亦バン等も用意してくれた。

自分は先に小屋を出て、もう來るだらうと思つて登つたが木賊

山の頂上まで來たがとうとう會へなかつた。大崎が皆を導いて來た。自分達の出た所で十人一諸に「オーイ」と叫んだがやはり駄目で、ガレの所でどなつて見樣と云つた。其所でも何の返事も聞けなかつた。

自分はどうあつても彼等を探したいと夢中であつたが此の茂みの中を自分達の通つて來た通りに降る自信がなかつた。一米先の物は見えないのにこの電池一個で下る事は出來そうでなかつた。併しもしわからねば自分一人でも下つて探さねばならぬと決心してゐた。

頂上で皆一諸に下つてみようかと云つたが、否それこそ危險だと云つてもし下るのなら小屋番に來てもらはなければとても駄目だと云つて一應小屋へ引上げた。その中一人が早速小屋番に賴んでくれたがどうしても出てくれる樣子がなかつた。仕方ないから自分一人下るから頂上で電氣を照してもらひたひと云つた。そんな事はやめてくれと極力引止められ明朝起きがけに行つて探がしませう、リーダーが經驗のあるしつかりした人なら、亦食料もシラフもあるのだから一晩位どうにでもして避難するだらうからと云ふのでやむなく中止して明朝にする事にした。シラフに入つても寢つかれず今にも其所に來る樣な氣もするし亦誰かが、まいつて救助をもとめてゐるのではないかと思ふとどうしても寢られなかつた。

十、十九　晴

朝五時半案内人と四人行つて、茂みを下つた。この茂みは二段になつてゐるのであるが大崎と僕は二段目のブッシュを貫けて下つたが、何の手懸りもない。小屋番が一たん此所迄上つて來てくれと云ふので行つてみると今日中には栃本へ下らねばならないのだと云ふ、小屋へ行つて相談する事もあると云ふので引き上げた。東京との連絡をせねばならないので東京高校の人に學校山岳部宛と自宅へ二本の電報を託した。亦某山岳會の人には電話で學校へ報らせる樣に賴んだ。

小屋番の相談と云ふのは「お金」の事だと知つたので五圓渡して一諸に捜してもらふ事にしたが、それはとても感じが悪い事であつた。まるで掌をかへす樣に變つて言葉使ひも違ふではないか、神聖なる山にあつて、この道場とも言ふべき山の案内人が之でよいのであらうか、素朴で親切な人達ばかりかと思つたが此所の秩父の小屋番はあんなかと思ふと何かしら秩父を輕蔑したくなるのだつた。

九時頃出かけて探したのだが通つたとも思はれる樣な跡もわからず自分達の別れた場所も判然としなかつたが十二時半頃晝食に歸らうと尾根筋を登つて行くと「リュックだ」と三十米程先の木に寄らせた「リュック」を發見した。だが誰の姿も見られなかつた。居るのだつたら此の附近に違ひないと一生懸命に彼所此所探し歩いて縱走路に出た。之はきつと三人で澤に下り引き上げて仕舞つたに違ひないと小屋番は云つた。二時になるも外に發見する事は出來なかつた。リュックを背負つて食事をする爲小屋へ歸つた。きつと先に歸つたんですよと云ふ案内人の言葉が確かな樣な氣がしてきた

だが三時半頃行つて一時間半ばかり捜したがわからなかつた。

今日の捜査で發見したリュックの謎がどうしてもわからず色々想像してみるばかりであつた。だが結局澤を下つたに違ひないと思ふ樣になつた。

學校とも連絡したので二十日中には誰か來てくれると思ひ、二十日はもう一日捜す事にした。食料もあと一日分だけなので一たん歸京する事にした。

十、二十　晴

昨日も今日も良い天氣で遠い北の山々も白い頭を見せてゐた。可成り寒くはあつたのであるが。

小屋番は今日はどうしても歸らねばならぬと云つて九時頃支度を仕出した。そして歸りの費用として三圓要求した。此の日の捜索の第一回は彼小屋番と一諸に出かけたので五時半頃から始めた。二段のプッシュを縱走路から數回繰かへし、長沼君のリュックが發見された所へも仲々容易に行かれず。大體三君と別れた場所と思はれる地點より遙かに下へ降つても見たのだつた。何と云ふ今日は良い天氣なのであらうか。あの日、一日惡く前後は全く快い天氣が續いてゐる。何と自然の力の恐ろしい事か、友に別れ未だ捜索の甲斐なく、皆に會ふ事が出來ず、唯五里霧中に捜し歩くだけである。

「オーイ」「ヤホ」と叫んでも返事のあらばこそ、遠く東澤下流からは材木の切出しの音が聞こえるばかりであつた。石南花の下から時折小鳥が飛び立つのでびつくりさせられた。午後は二度捜索したが何も發見されなかつた。

登山者は一人も來ない恐ろしい程の靜けさであつた。夜はとても冷えるので小屋の中に山積にして置いて消えない樣に氣を付けねばならなかつた。米は充分あつたが野菜も少くあとは味噌があるばかりであつた。

雁坂へ行つたのではないのか、それともやはり澤を下つてしまつたものであらうか、それにしてもリュックを置いてゆくはづがないと、二人は想像し合つた。夕飯も終へ七時になつても誰も登つては來ないので明朝、夜明けと共に出發する事にして用意を整へた。ストーブにうんと投げ込んで横になる。足は大分暖かいが頭の方はとても寒い。風が強く吹き上げてゐるので火には絶えず注意した。一時に起きて薪を入れる。夜明け迄の時間の長い事未だ三時かと朝の來るのを待つた。

十、二十　晴

五時に出發、甲武信岳を登り三寶、大山を經て十文字峠へ來たのが八時頃であつた。秋空の澄んだ好天氣で四方の山々は存在を明らかにしてゐた。十文字峠は大木が茂り峠の樣な感じのしない處だつた、其所へ三人地元の人らしい人達が登つて來たので自動車の時間を聞くと十時と四時の二回だと云ふので急ぐ出發梓山へと急いだ。驅け出す樣にして山を下つて行つた。どうあつてもその自動車に間に合はねばと急ぎに急いた。ジグザグの道を下り澤に出た。汗はびつしよりかいてしまつた。程なく千曲川に出で八ケ岳を目の前に見た。

部落を過ぎ、千曲川に沿つて一間程のいゝ道を下を見たまゝ歩いた。十時十五分前に梓山へ着いた。自動車はまだ來ないのですかと聞いたら、昨日も來ないし、今日は來ないでせう。歩いた方

がよいと云はれたが信濃川上迄は十五粁ある。がつかりしたがぼつ〳〵歩いて行かう今日中には驛へ着くだらうと歩き出した。

トラックが通るのでそれに乗せて貰をうと思つたがぼつ〳〵歩かうと重い足を引いて行つた。廣い河原の中の道を二人でゆくと突然「おい」と山田さんが飛び出して來た。びつくりして「前田は」と云ふと「知らない」と云つた。之は一大事だ僕達は彼等三人は歸京したものと思つて下つて來たのだと今日迄の經過を話した。重大事件になりそうだから電報を打つてくれと頼まれ、一たん歸京して本部へ行き詳細の報告する樣命ぜられて別れたのは居倉の部落に入る處であつた。（一九四一、一〇、一八）

附記

尙今回の遭難に就いての山岳部の處置反省等に就いては、近く追悼文と併せ刊行する豫定であります。

新羅二郎君より

先達は寄書有難く拜見しました。相變らず盛大の御樣子で非常に懐しく思ひました。殺風景な大陸に居ますと昔の山の仲間、クラスの奴等などからの便りが一番嬉しいです。二年餘りも内地を離れてゐても忘れずに便りを頂き全く有難う御座いました。

相變らず元氣で連日活躍して居ます。内地の樣子も今では全く昔の面影はないらしいですね。頼もしい事です。鷹野中尉殿の追悼文是非書きたいのですが、今封書は出せませんので殘念です。今でも生きて居られる樣な氣がしてなりません。

諸先輩によろしく、又書きます。ニュースを待つて居ます。

（小谷部　宛）

記　錄

金峯行（十月十八日）

高橋　要二

先達ての連休に金峯へ行つて來ました。十七日は快晴でしたが、肝腎の十八日が大雨で、散々な目に會ひました。小生達は金山から登つて甲府へ下る豫定でしたが、朝宿を出て間もなく降り出して大日小舍の邊りから猛烈な雨になつて了ひました。お蔭で、下着までズブ濡れになり、頂上から又金山へ戻りました。折柄三日連休の事とて金山の宿は超滿員、增富鑛泉も同樣で、小生等の宿泊した處は、平生物置にでも使つてゐるらしい小屋でした。

翌十九日は打つて變つた一點の雲もない快晴で何とも殘念でしたが空しく歸京しました。何れ再度の機會を狙つて居ります。

（一〇、二四）

小柳　二郎

大藏高丸（十一月十六日）

晩秋の一日、のんびりとカヤトの山を歩いて來ました。文字通り一點の雲も無く、南アルプスと富士山は崇嚴そのものの姿で誠に身の引締る樣な心地でした。午後からは逆光を受けて富士の山肌がジュラルミンの樣に光つて素晴らしい眺めでした。

友田記念碑寄附金報告

第一回分（敬稱略）

小柳 三圓　松浦 十圓
望月 三圓　中川 五圓
山口 五圓　村尾 五圓
鈴木 五圓　太田 五圓
堀岡 五圓　手塚 五圓
小谷部 五圓　大塚 三圓
吉澤（一） 五圓　近藤 十圓
磯野 五圓　宇佐美 三圓
久保田 五圓　高見 五圓
丸茂 五圓　打橋 三圓
和田 三圓　小林 五圓
森川 三圓　榎本 五圓
岩崎 五圓　日江井 六圓
增山 三圓　林 五圓
黑田 三圓　船本 三圓
渡邊 五圓　柿原 五圓
計 一五一圓

第一回分は八月十五日の針葉樹會の席上で學生側へ贈呈せり。

第二回分（敬稱略）

岡田 三圓　小栗 六圓
中島 四圓　五十嵐 四圓

第二回分は近々締切の上針葉樹會の席上にて贈呈の豫定なり。

（針葉樹會々計幹事）

針葉樹會臨時集會　十月二十三日　於如水會館

出席者（會員）　中川、吉澤（一）、增山、小柳、堀岡、小谷部、岩崎、大塚、（部員）　宮城、深谷、專門部々員秩父遭難の報により臨時集會。對策を打合す。

針葉樹會臨時集會　十月三十日　於如水會

出席者（會員）　中川、吉澤（一）、村尾、高橋、高見、增山、小柳、柿原、小谷部、岩崎、大塚、部員全部

過日の專門部々員遭難事件に關聯し、常盤部長の御招きにより、會員有志及部員全部が參集した。一同會食後、別室で部長の御挨拶があつて、代表山田君より遭難前後の經過につき大體の說明を聽取し、引續いて生還者細野、大崎兩君より當時の行動等につき更に詳細な說明があつた。之より先、部長は部員に對する告別之辭を殘して中途退席されたので、中川孫一君之を朗讀、部に於ては愼重なる態度を以て、之に對處する事となり、又會員側より、今回の事件に關し獻身的に働いた部員一同に對する犒ひの言葉があつて散會した。

針葉樹會臨時集會　十一月五日　於數寄屋寮

出席者　中川、五十嵐、渡邊、村尾、太田、高見、增山、丸茂覺張、中島、小柳、林、小谷部、小林

上京された五十嵐、中島兩君を圍み急に臨時集會を催す。久し振りに心の緊張もとけて和かに打寛いだ。珍らしく覺張君も來會された。

針葉樹會臨時集會　十二月五日(金)　於數寄屋寮

出席者　中川、村尾、高橋、堀岡、岡田、小柳、林、小谷部、佐々木、大塚

急に名古屋轉任のペンちやんの送別會を開く。送別登山位したかつた。が名古屋なれば時々山では會へる。

針葉樹會例會　二月六日(金)　於如水會館

出席者　(會員)中川、吉澤、増山、丸茂、高見、鈴木、堀岡、太田、小柳、林、佐々木　(部員)山田

懇親スキー旅行の打合せの話はずむ。

針葉樹會例會　三月十二日(金)　於如水會館

出席者　(會員)中川、増山、吉澤(松)、堀岡、小柳、林、佐々木、(部員)松下、原田、間々田、鈴木、大野、樋口

名簿訂正(其ノ二)

手塚　晴雄君　神田區須田町一ノ一一に訂正

山口　稔一君　(町名變更)　板橋區豊玉北三丁目十一番地ノ三

覺張　泰三君　(東京住所追加)　豊島區巣鴨七ノ一、八五四

橋本方

佐野　茂雄君　杉並區方南町七三へ移轉

堀岡　清君　杉並區荻窪一丁目五八へ移轉

村尾　金二君　名古屋市千種區田代町三本松六四へ移轉

(勤務先)　名古屋市西區御幸本町日本徴兵館内

石油共販株式會社名古屋支店

和田　英達君　中華民國北京東交民巷

正金銀行北京支店へ轉任

林　俊介君　澁谷區上通り四丁目二番地へ轉居

電話澁谷(46)三四二三

住所變更其の他名簿訂正を要する場合は至急會報係迄御通知下さい。

部誌

毎月曜日の集會の模様左の如し。

九月、十月　夏山合宿中、當局より受けた合宿中止の命令加へて時局切迫の影響下に、此の月頻りに論議「戰爭と登山」に集中さる。

十一月　奥秩父遭難の悲報、爲す術を知らず。ひたすら全部員後始末に忙殺さる。

十二月　冬山合宿「國立より富士山へ」に決定す。部員一同再起の覺悟。全部員參加の下に國立より徒歩にて富士に達し、後、頂山への雪嶺、天幕移動、御中道廻り、屏風尾根等を試みる計畫を立つ。

再び大東亞戰爭勃發の爲、合宿中止を餘儀なくさる。

爾後一二三月見る可き集會なし。

(以　上)